

《研究ノート》

〈試訳〉 Lokāyata 派 Jayarāsi 著 *Tattvopaplavasimha*  
 ([他学派の主張する] 真の实在を打ち砕くライオン)  
 における Sāṃkhya 派 ātman 説の論駁

辻 本 俊 郎

Jayarāsi (ca.8,9c) の *Tattvopaplavasimha* における目的は対論者に応じた専一批判論 (paraparyanuyoga)、他学派が真の实在と考えているものを破壊することにある (生井智紹 [1996] 『輪廻の論証—仏教論理学派による唯物論批判』 東方出版)。本誌第 6 号に「〈試訳〉 Lokāyata 派 Jayarāsi 著 *Tattvopaplavasimha* における Nyāya 派 ātman 説の論駁」を発表した。引き続き本小論では、Jayarāsi による Sāṃkhya 派の ātman (puruṣa) 説の論駁の箇所の試訳を発表したい。この部分も難解な箇所が多く見られ、読者の叱責は免れないことは重々承知している。しかしながら、敢えて試訳を発表するのは、前回同様、世界のどこの国の言語にも翻訳されていないことによるのである。識者の訂正やご教授を乞う次第である。

本試訳の作成に際して底本に用いたのは、

P.S.Samghavi, R.Parikh [1940] *Tattvopaplavasimha* of Shri Jayarāśibhaṭṭa, Gaekwad's Oriental Series No.87 (reprinted as Bauddha Bharati Series No.20, Varanasi 1987)

である。また、訳文中の括弧は次のように使い分けた。

( ) ……和訳をした語の言い換え、あるいは説明

{ } ……翻訳者が補った部分

Sāṃkhya 派の puruṣa 思想理解のために主として次の論考を参考とした。

- ・金倉円照 [1974] 『インド哲学の自我思想』 大蔵出版
- ・中村元 [1995] 『インドの哲学体系Ⅱ『全哲学綱要』 訳註Ⅱ』 中村元選集 [決定版] 第29巻 春秋社
- ・中村元 [1996] 『ヨーガとサーンキヤの思想』 中村元選集 [決定版] 第24巻 春秋社

- ・ 山口恵照 [1986] 「サーンキヤ体系におけるブルシャの概念」 中村元編『自我と無我—インド思想と仏教の根本問題—』 平楽寺書店

(試訳)

(p.79 1.20) 同様に、Sāṃkhya の学説によってもまた、ātman には享受 (bhoga) は全く生じない。何故ならば、ātman において享受 (bhoga) は存在しないからである。

享受 (bhoga) という言葉によって楽 (sukha) が言われるのか、あるいはそ (楽) の認識 (saṃvedana) が言われるのか [のいずれかである]。

その両方 (楽と楽の認識) が知覚機能 (buddhi) において存在するのであって ātman に [存在するの] ではない。

また、以上のように確立するとき、知覚機能 (buddhi) には享受者性 (bhoktr̥tva) があるのであって、ātman には [享受者性は] ない。

(p.79 1.24) もし、知覚機能 (buddhi) に存在するとしても、享受のみによって ātman には享受者性があると言われるのならば、その時、知覚機能 (buddhi) に存在する行為主体性によって ātman には行為主体性があることになってしまう。

だから、それ故「[ātman が] 行為主体とはならない」というこのことが言われるべきではない。

もし、ātman において行為主体性が存在しないから、[ātman は] 非行為主体であると指し示されるというのならば、享受 (bhoga) もそれ (ātman) に存在しないから、享受する ātman は存在しない。

(p.80 1.4) そこで、もし、実に行為主体性というのが比喩的であるというのならば、例えば、従者 (戦士) において存在している勝利と敗北とが王に適応されるように、知覚機能 (buddhi) において存在している行為主体性が puruṣa (精神的原理) に適応される。

もし、このようであるのならば、知覚機能 (buddhi) において存在している享受 (bhoga) もまた、puruṣa にとっては、比喩的な [享受] が結果として生じる。

比喩的な [享受] もまた、ātman においてありえない。何故ならば、そうでなければ (比喩的な享受 (bhoga) が ātman にあるとするのならば)

認められないからである。

また、享受 (bhoga) が存在しない時、ātman に解脱 (mokṣa) を求めることはなされるべきではない。繫縛を有しているものが解き放たれるのである。また、ātman において繫縛 (bandhana) は存在しないのである。実に享受 (bhoga) というのが繫縛 (bandhana) である。

そして、それ (享受 (bhoga)) は、ātman において全く存在しないのである。それ (享受) が存在しないから、解脱 (mokṣa) もまた、不適切なのである<sup>1</sup>。

(p.80 l.12) 同様に、享受者性のない時、ātman には存在性があることは成立しない。〔Sāṃkhya 派は言う。〕享受されるべきもの (すなわち、楽や苦など) によって、享受者の推論 (anumāna) がある。

たとえば、スープなどは、享受者なしにはあり得ないということが経験されるように、変化を有する、享受されるべき根本原因 (pradhāna) それによって、享受者が推知される (anumīyate)。

〔Lokāyata 派が答える。〕このことは不合理である。

ātman には享受者性が存在しないのにもかかわらず、どうして享受されるべきもの (楽など) によって ātman が推知される (anumīyate) のか。

享受されるべきもの (楽など) には ātman との関係が知られないから。

また、それ (享受されるべきものと ātman との関係) は知られない。何故ならば、ātman は直接知覚 (pratyakṣa) の対象ではないから。

また、それ (直接知覚 (pratyakṣa)) の対象性がないというのは、「特殊性を知ることがない」と言われる。

もし、直接知覚 (pratyakṣa) によって ātman が確立されるというのなら、その時、直接知覚 (pratyakṣa) の対象であるという性質と ātman が同一性を有することになり、さらに直接知覚 (pratyakṣa) と推論 (anumāna) の対象という性質と〔同一性を有することになる〕。

そして、それ故、〔ātman には〕一度確立したということを再度論証されるべきことという〔過ちに〕陥ってしまう。

(p.80 l.21) 「あなた方 Sāṃkhya 派が」 「スープなどは、享受者なしにはあり得ないことが経験される」という。

その場合、〔スープというものは〕①身体などから別の享受者なしにはあ

り得ないことが経験されるのか、それとも、②単に身体という享受者なしにはあり得ないことが経験されるのか〔のいずれかである〕。

その中でもし、①身体などから別の享受者なしにはあり得ないことが経験されるというのならば、その時、喩例もまた、喩例によって証明するのと等しい。〔例えば〕ātman が〔身体などから別であることは〕超感覚器官性によって〔というようなもの〕である。もし、ātman が直接知覚 (pratyakṣa) によって知られるものであるというのならば、その時、ātman は確立したものである。〔したがって〕推論 (anumāna) は必要ではない。

(p.81 l.1) もし、②単に身体という享受者なしにはあり得ないことが経験されるというのならば、その時、身体の変異したものが、享受と結びついているからといって、ātman が確立するわけではない。〔何故ならば、ātman が変異したものではないから。〕

あるいは、ātman にとって享受 (bhoga) が存在するでしょう。そうであっても、なされていない行為が享受となり、なされた行為が消滅するという過失に陥ってしまう。なされていない行為の結果が、ātman につき従ってくる。

また、なされた行為の結果には知覚機能 (buddhi) というものは成り立たない。

また、もし、なされていない行為の果報が〔ātman に〕つき従ってくるというのならば、その時、解脱した ātman にとっても、そ（なされていない行為）の果報があることになってしまう。何故ならば、ātman に〔なされていない行為の果報の〕はたらきを抑制する原因が存在しないから。そして、それ故、〔ātman は〕独存しない（解脱しない）という過失に陥ってしまう。

(p.81 l.9) そして、これ故に〔ātman の〕独存は不適切である。何故ならば、享受されるべきものと享受者との両者が存続しているから。

実に〔Sāṃkhya 派に属する〕あなた方の主張では、享受されるべきものが ātman を決して捨ててしまうことはない。享受されるべき性質という特徴によって ātman の決定がある。そのような特徴を超えてはたらくことはない。何故ならば、享受者性 (bhokṛtva) という特徴を有する ātman は〔享受者性 (bhokṛtva) を〕超えてはたらくことはないから。

そして、〔ātman が享受者性 (bhokṛtva) を〕 超えてはたらく時、ātman が破壊するという過失に陥ってしまうのである。

注

- i) ātman は独存であるのに解脱するというのは不合理である、というのが Jayarāśī の主張である。